

水交会関連挨拶（3編）

1. 第5回海軍と海上自衛隊の集い（1997.09.25）

（佐々木注） 1997年8月3日作成

原題「海軍と海上自衛隊の集い（1997）」B5版2ページ。

以下、原文をそのままA4版に変換し、欄外にページを付したもの。

「海軍と海上自衛隊の集い（1997）」

9. 9. 25

水交会の中村でございます。共催の水交会と海上桜美会を代表しましてご挨拶申し上げます。本日はご多忙中にもかかわらず夏川海上幕僚長、原偕行社会長ほか来賓各位のご出席を頂き、また海軍の先輩、海上自衛隊のOB各位多数のご参加を得て、海軍と海上自衛隊の集いを盛大に催すことができ、誠に有難く存じます。

この集いも回を重ねて第5回となりました。第一回するときにも申し上げたのですが、海上自衛隊と海軍は、国内基盤も戦略環境も軍事技術も大きく異なっておりますものの、同じ日本人が同じ海を舞台として同じ海上防衛という使命に挺身する以上、両者に共通する大きな流れのないはずはありません。この流れは海上自衛隊創設時基幹要員となられた海軍出身の方から海上自衛隊に伝えられ、時代の進展に応じて変えるべきものは変えられつつ、その本質的なものは今日も脈々として生きています。

何がその本質的なものか、いろいろの見方があると思いますが、私は一つは任務の完遂であり、一つは厳しい規律と血と涙の通った人間関係の両立併存ではないかと思えます。これは一例ではありますが、海軍の良き伝統が海上自衛隊で長く継承されることを願いつつ、旧海軍の人々と海上自衛隊の現職及びOBの人々との交流を深め、相互理解を培いさらには一体感を育成する事を狙いとしてこの集いを行ってきたわけであります。

ご承知のとおり先日水交会は、今まで非公式に行ってきた海上自衛隊に対する協力支援を、目的の一つとして正式に認可されました。勿論このことは水交会と海上桜美会の一体化を直ちに意味するものではありません。一体化は私どもの目標ではありますが、両会員の多数が一体感を持ちその機運が熟して初めて可能になるものと考えております。

話は飛びますが、バブル崩壊後、私たちの目の前に続々展開され今も展開されつつある、政治家各界の眼を覆うような醜態を見るとき、私たちが経済的繁栄の代償としていかに貴重なものを失ったかを思わずにはおられません。失ったものの中で最も大きいものは、国民としての誇りであり、また恥を知ることでないでしょうか。そしてあの玉串料の違憲判決を怪しまない現代の風潮が今日の基本的病根を語っているように思われてなりません。戦没者や自衛隊の殉職者など、国家国民のため一身を擲って今日の平和と繁栄の礎を築かれた英霊に対する慰霊顕彰を忘れて、日本の精神的再建はあり得ないと思うからであります。

慰霊顕彰、伝統の継承、海上自衛隊協力、を主な目的として水交会と海上桜美会が大同団結しさらには一体化に進むことを願い、またこの集いが両会員及び海上自衛隊現職三者の心からの交流に寄与することを祈ってご挨拶と致します。どうかお時間の許す限りごゆっくりご歓談下さい。

2. 水交会会長退任 (1998.04.24)

(佐々木注) 1998年4月24日作成

原題「退任挨拶」原文はB5版1ページ。

以下、原文をそのままにA4版に変換、ページを付与。

退任のご挨拶

中村悌次

このたび任期満了により、会長を退任することになりました。

会長在任中、会員の皆様から賜りました多大のご支援ご協力に対し、衷心より厚くお礼申し上げます。

この六年の間、会員皆様のご支援を力に、役員各位及び事務当局の絶大な努力に支えられて会務に当り、とくに水交会将来の大計確立を大きな目標として、努力を尽して参りましたが、不敏不才、ご期待に十分添い得なかったことは誠に申訳なく、深くお詫び申し上げます。

今日私どもが毎日目にするわが国政治、経済、社会等の現状は、何よりも基本からの教育の立て直しを軸とした精神的再建の急務であることを示しているように思われてなりません。そして其の根本となるものは、国家国民のため一身を捧げ、今日の平和と繁栄の礎を築かれた幾多の英霊に対する感謝と慰霊顕彰であり、また極端に行過ぎた自己中心の風潮の是正ではないでしょうか。其の意味からも水交会存在の意義は益々大きいと信じております。

水交会も会員の高齢化に伴って大きな転機を迎え、既に会員の三分の一以上が、終戦時海軍諸学校の生徒であった人人からなっております。これらの方々を加えると、海軍の勤務の経験のない人人が会員の半数を越えるようになりましたが、そのなかに海軍の伝統精神が脈々と流れているのはご同慶の至りであり、この伝統精神こそ永く継承し、精神的再建の中核としたいものであります。このように意義の深い水交会を将来永く維持発展させるための重要な方策である海上桜美会との一体化は、なお問題が解決しておりませんが、お互いに誠意を以て努力しており、必ずや道が開けるものと存じます。

どうか新会長を中心に水交会が末永く発展を続け引続き国家社会に貢献されますよう祈ってやみません。

ここに重ねて会員皆様のご厚情に対し厚くお礼申し上げご挨拶と致します。

3. 顧問会 (1998.08.18)

(佐々木注) 1998年8月18日作成
水交会と海上桜美会の一体化の会議における挨拶
原題「顧問会」原文はB5版4ページ。

以下、原文をそのままA4弁に変換し、欄外にページを付与。

顧問会 挨拶

平成9年9月

本日の顧問会では、水交会と海上桜美会との一体化について、忌憚のないご意見を伺い、今後の指針にさせていただきたいと存じます。此の問題につきましても、すでに昨年、一昨年とご意見を頂いて参りましたので、今更またという感じをお持ちになるとは存じますが、ご承知のとおり去る6月、水交会寄付行為の一部変更と厚生省、防衛庁両省庁による共同管理について、正式認可が得られましたので、此の問題が一段と現実味を持って浮び上がってきましたことと、此処にお集りの方々は、水交会及び海上桜美会の、過去および現在の役員をお務めの方々を含むだけでなく、近い将来両会を背負われるであろう方々を網羅しているのではないかと思いますので、率直に意見を交換し、あるべき方向採るべき施策などを検討し一体化の実現に結びつけるのに最適の機会ではないかと考え、重複を避けず敢て議題とさせていただきました。もちろん共同管理の実現が、そのまま直ちに両会の一体化を意味するものとは考えておりません。これは昨年岡部顧問のご質問に答えたとおりであります。両会がそれぞれ独立した団体である以上、その一体化には、言うまでもなく、おのおのの会員全部とはいわなくとも大多数のコンセンサスを得ることがまず必要となるからであります。

そこでご意見を伺うのに先立ちまず私自身の考えを率直に述べさせていただきます。

水交会の将来構想として、此の一体化が採り上げられたとき、私は二つの大きい難関があると考えました。一つは寄付行為の変更と共同管理について監督官庁の認可を得ることが容易ではないこと、もう一つは両会会員特に桜美会の大多数が果してその気になるであろうかということでありました。敗戦後海上自衛隊が発足した当時の経緯や戦後の我が国学校教育の実状を考えると、海軍と縁のなかった海上自衛隊員やその出身者の海軍に対する感情は複雑で、水交会と一体化することに対する心理的抵抗感は相当大きいのではないかと想像され、したがってまず地道に両会会員の交流を強化し接触を密にして一体感の醸成を図る必要があるように思われました。

このような難関を考えますとき、偕行社のとられたように、水交会も将来長く存続することを企てず、現会員の減耗に応じ適当な時期にその歴史的役割を果し終えたとして、解散することも一つの有力な選択であり、また無理のない方策とも思われました。しかし私があえてその道を選ばず、全く自信もないままに、此の二つの難関に体当たりすべく決心したのは、水交会を設立され発展させてこられた諸先輩の遺志を受継ぐという気持が勿論基本ではありますが、私自身次のように考えたからであります。

水交会の目的は、ご承知のとおり、遺族等の援護、戦没者等の慰霊顕彰、海軍の良き伝統精神の継承、会員相互の啓発、扶助、親睦であります。今日最も重要なものとして後世にも受継いで行くべきものは、慰霊顕彰と伝統の継承ではないかと、私は考えております。国家国民を守るために一身をなげうち今日の平和と繁栄の礎を築かれた方々の御霊を慰め、その功績を末永く伝えることは、国家として当然なべき責務であり、これなくして一旦緩急あるとき義勇公に奉ずる精神が養われるはずがないと思います。多くの身近な先輩、同僚、後輩や部下を失った私たちの世代は、此の慰霊顕彰の思いが格別切なるものがありますものの、戦争を全く知らない世代の人々に私たちと同じ切実な思いを期待するのは、無理でありましょう。しかしせめて同じ日本人として、同じ海を舞台に、同じ海上防衛の志を立てた海上自衛隊員やその出身者には、後に続く事を信じて散った海軍戦没者の慰霊顕彰（今後は海上自衛隊殉職者を含みますが）を受継いで欲しいとの思いを禁じることはできません。例えば現在水交会では月例参拝会として、毎月一回各クラス等の代表が靖国神社と千鳥が淵墓苑にお参りする行事を続けていますが、幹候期の参加によって此の行事を何時までも続けていければどんなに嬉しいかと思うことです。なおこの慰霊顕彰ということは「事に臨んでは危険を顧みず、身を以て責務の完遂に務む」べき自衛隊員の精神的基盤を培ううえに、なくてはならないことと私は信じています。

もう一つの海軍の伝統の継承については、海上自衛隊も40数年の歴史を重ね立派な良き伝統が育ってきているので、今更海軍を持出す必要はないとの意見ももつとも聞えます。しかしその海上自衛隊の伝統のルーツは、少なくとも相当な部分が、海軍にあることはいうまでもありません。そして山梨大將が申されたように、歴史が生きて動いて歴史が仕事をしているという歴史の重みが、どこの社会にもあることを忘れてはならないと思います。日本海軍はわずか77年の歴史とはいえ、世界のどこの海軍にも遜色のない歴史を残しました。その伝統の中には、例えば任務の完遂とか、厳しい規律と愛情と信頼の溢れる人間関係の両立とか、正しいと信じる意見は遠慮なく言えるそしてユーモアの通じる雰囲気とか、何時の時代にも通用するものが少なくありません。まさに貴重な国民的資産ともいうべきものであります。この歴史とか伝統ということは、空気のようなもので、その中に浸かっているときには当然として全く感じないが、なくなっってはじめてその有難さが判るものと思います。新興国の海軍が日本海軍を背後に持った海上自衛隊をいかに羨ましがったかは、私の留学時の思い出の一つであります。この伝統を後世に伝え残すことは、極めて意義ある仕事であり、受継いでいくのは海上自衛隊であってほしい。海上自衛隊としても、それが精強な部隊を建設、維持、発展していくうえに最も望ましいことではなかろうかと考えました。

そこで、これらの目的を目指す水交会をここでなくしてしまうのはいかにも惜しく後世に残していく価値があるのではないか。その為には海上桜美会との一体化を図らねばならない。先に挙げた難関を解決する自信は全くないが、最善の努力を尽してできなければ、それは自分の無力の致すところ、やらないで最初から難しいとあきらめるのは男ではない、こういう考えでいわば玉砕の覚悟で取組んだことでした。

幸い秋山理事長を初めとする事務当局の非常な熱意と努力、木山顧問はじめ関係の方々の強力なご支援によって第一の難関は解決できましたが、これに中身を盛るのはこれからであります。水交会会員の中にも一体化に賛成しない人が皆無ではありませんが、殆どの会員は海上自

衛隊員或はそのOBが受継いでくれることを期待している少なくとも反対ではないと思います。一方海上桜美会では、平成8年の総会で、水交会と新団体を設立することを基本方向とする方針を打出されましたが、ホンネとなると今回認可をえた新しい水交会との一体化をどれだけの会員が支持するか、言換えれば一体化した場合どれだけの会員が参加するか、私は些か危惧を持っております。

それといたしますのも、先ほど報告のあった今年の遠航で、ハワイのパンチポール国立墓碑慰霊碑に参拝した防大出の実習幹部の所感の一節に「大昔の遺物というイメージしかない靖国神社や教育参考館」或は「五十五年前に日米が戦った事実を私はもう何百年も前のことのように考えていた」とありました。これが今日の学校教育を受けてきた若い海上自衛隊幹部の実態の一端でありましょう。またこの席にもおられますが防大創設当時に入られた方々の複雑な気持ちも察するにあまりがあるからであります。

こういう心理的或は心情的問題に加え、両会にはそれぞれの過去の経緯や事業に対する考え方があり、第二の難関の解決はより難しく、今後協力して一層努力する必要があるでしょう。以下細部にわたって恐縮ですが両会の主な考え方の相違について申し上げます。

平成八年の桜美会総会以来、水交会と海上桜美会は両方から委員を出し、桜研究会と名付けて一体化のための研究を行ってきました。今日までの討議では、目的については直接の問題はありませんが、具体論になると次の問題の調整が難航すると思われれます。第一に会費の件つまり参加する人がこれらの目的のためにどの程度までなら何とか負担しようという気になってくれるかということです。具体的には水交会側は必要な事業を行うためには現行年会費5000円が最低限と考えているのに対し、桜美会側は今までの年会費2000円から5000円にするのは無理があり強行すればコンセンサスを得るのが難しいとの意見のようであります。第二に各種の目的の間の軽重優先度をどう考えるか、具体的に申しますと、水交会側は機関誌水交を充実し現状どおり発行を続けることが、組織を維持し、また伝統を継承するため、不可欠と考えているのに対し、桜美会側は、組織を維持拡充し、また海上自衛隊支援の目的を達成するため、地方組織の充実を最優先とし、そのため相当な交付金が必要と考えておられます。ほかにも多少の問題がありますが、大きいのはこの二つです。この顧問会の席上これら細部の問題に入るのは適当ではないと思いますが、一応現状をご紹介いたしました。

このような現状をふまえ、私は次のように進めたいと考えております。まず基本的に重要なことは、両会の会員が、戦没者や殉職隊員の慰霊顕彰、海軍の良き伝統の継承、海上自衛隊の支援協力、という大きな目的に心から賛成し、多少の犠牲を払っても自ら参加する意志を持ってもらうことではないかと思えます。その為には会員に良く趣旨を説明し理解を得ることも必要でしょう。

次に具体化の問題については、この際少々無理をしても一気呵成に事を進めるべしとの意見もありますが、私は多少時間がかかっても、十分討議を尽し、相互の理解のもとできるだけしこりの残らないよう一体化を実現したいと考えております。そのため桜研究会を舞台に両会が十分に意見を交換し、従来の経緯にとらわれず、適切な結論を得ていただきたいと思えますが、抽象論、観念論では平行線となる恐れがあり、具体的な経費計画から重点とする事業、犠牲とする事業、その程度などを良く研究し、経費の裏付けを持った事業計画として必要なら二案でも三案でも作って比較検討してはどうかと思えます。

水交会としては、明年度の理事会で寄付行為細則を決定する必要があり、それまでに合意に達するのが最も望ましいと思いますが、拙速はとらずやむを得なければ二段引きで応ずることも考えております。いずれにせよ、同じような目的を持った両会が一体化することは、会員にとっても支援を受ける海上自衛隊にとっても望ましいのは当然でありますので、何とか小異を捨てて大同に就けないかと念願しております。ただしどうしても合意の得られないときは、今回の共同管理は、将来のため水交会の選択肢を広げたという意味にとどまることもあり得るとの覚悟も持っています。

以上卒直に私の考えを申述べました。皆様のご意見を頂ければ有難く存じます。